

連日のように浅野家を訪れる不良学生に、由加里は加虐性愛色の強い行為をともなって抱かれるのだ。

「ママさん、由加里も大変だぜ。俺たち二人を一度に相手しているんだからな。そこで提案があるんだけどよお、ママさんが俺のお相手をしてくれるっていうんだったら、由加里は二人を相手にしなくてもよくなるぜ。このままじゃあ、お前の娘の身体、壊れちゃうかもな」

由加里はすでに志郎と一緒に二階の自室に消えていた。残った隆志が、母親の志乃に交換条件を突きつけているのだ。

志乃の肩に隆志の手が置かれた。志乃の身体がびくっとする。

「なあ、いいだろ？俺って年増好みなんだぜ。美人のママさん、娘の代わりにしなよ。娘を助けると思ってさ。母親だったらそうするよな。愛する娘のためにその身を捧げろよ」

隆志が志乃の腕をとり、椅子から立たせた。志乃は、いやいやとるように艶やかな髪をさわさわと左右に振りながら、椅子から立ち上がった。そのくびれた腰に手がまわされる。

「ママさんの寝室に行こうぜ。そこでたっぷりとかわいがってやるぜ。未亡人のママさんよお」

隆志は腰を抱いたまま、志乃を歩かせる。志乃は美しい顔をうつむかせて従った。

寝室にはダブルベッドがあった。クローゼットに鏡台、タンスが置かれ、白いレースのカーテンが窓ガラスをおおっている。

隆志は志乃を抱き寄せ、強引にキスをした。志乃の美しい顔が眉間をよせてゆがむ。それでもお構いなしにキスを続け、首筋にまで口を這わしていく。その汚辱感に志乃はさらに表情をゆがめ、若者の強引な愛撫に耐えた。

「ママさんの裸、見せてもらうぜ」

「その前にシャワーを使わせて……」

「そんなこといいさ……さあ、脱ぎ脱ぎしましょうね」

志乃は衣服を剥ぎ取られていく。クレージュのブラは、高さのあるツンと上向きのシルエットを見せ、スカートを下ろしたショーツは、同じクレージュ色で光沢のある生地は総刺繍で飾られている。ショーツの中央部分は、熟した恥丘の盛り上がりそのまま演出している。官能的な光景だ。

「恥ずかしい……」

「ふふふ、男に裸を見られるのは久しぶりかい？未亡人ママさん」

ブラの金具を隆志は慣れた手つきではずしていく。プルンと飛び出た乳房は弾力と柔らかさがかねそろえ、頂点の乳首は色素の沈着の薄い清楚な様相である。隆志はその乳首に口を寄せた。甘い香りが鼻腔を刺激する。乳首を口に含んだ。志乃の身体がびくっと震える。

乳房を揉み、乳首を舌で転がすようにして愛撫すると、志乃の身体に変化が生まれ、乳首が突起してしこってくるのだ。

「感じているんだろ？」

「そんなことないわ……おぞましいだけよ」

「乳首固くなっているぜ。男にこうやってもまれるのは何年ぶりだい？それとも旦那が死んでから男漁りでもしていたかい？」

「そんなふしだらなことしないわ！」

「ふふふふ、そうむきになるなよ」

隆志の手がショーツにかかってきた。

いよいよすべてを脱がされるのだ。

「明かりを消して……」

「それじゃあママさんの美しい体が見られないじゃないの」

ショーツが太股まで降ろされ一気に下げられていく。足首から丸

まった下着がはずされると志乃は息子の同級生の前で全裸にされたことをひどく羞恥した。「いい身体しているじゃないの。ここは薄毛だな」

股間の恥毛が薄いと隆志が言う。志乃は太股をよじらせて隆志の視線の侵入を拒む気配だが、隆志は未亡人の股間を覗き込むようにして顔を近づけるのだ。そして顔を志乃の股間にうずめた。

「ひいっ」

志乃の悲鳴が上がる。

「これがママさんの女の匂いだな。」

「ああ、よして……」

志乃は身体を震わせた。隆志の舌が敏感な木の芽を舐めてくる。舐め、吸い上げ、前歯でこりこりと噛んでくるのだ。志乃は身体をのけぞらせて、陰核への刺激に悶えた。未亡人の体に火がつけられる。

「次は、俺のものをママさんの口で気持ちよくさせてくれよ」

立ち上がった隆志はズボンと下着を脱ぎ去ると下腹部にくっつかんばかりに勃起した肉根を露出させた。